

大学における留学生教育

- 恵泉女学園大学の場合 -

武 田 知 子

はじめに

2005年4月に恵泉女学園大学は38名の留学生を受け入れ、提携大学からの短期留学生も含めると66名が在籍している。66名もの留学生を迎えることは初めてであり、どのように留学生教育を行っていくべきか現在も模索状態にある。2006年度の留学生の募集枠は30名であるが、毎年30名を受け入れるとすると、今の1年生が4年生になる2008年には、約120名の留学生が在籍することとなる。留学生が恵泉女学園大学で充実した学生生活を送るためには、どのような留学生教育を行っていくべきか真剣に考える時がきている。

現在、恵泉女学園大学では、1、2年生の留学生必修科目として日本語、日本語、日本語、日本語、日本事情という授業を用意している。プレイスメントテストを行い、1年生に対し4クラス体制で、2年生に対し2クラス体制で授業を行っている。春学期は主に読む能力、書く能力の養成を目標とした講義シラバスをたて実施したが、留学生担当者による打ち合わせでの話し合いから、留学生が学部での授業に対応するには、現状の指導方法では十分ではないと感じている。

また、今年度の新入生の状況把握のため、入学1ヵ月後の5月に1年生の留学生に対して面接を行ったのだが、大学の授業に慣れず、不安を抱いている様子が見られた。留学生の多くは大学入学前に日本語予備教育を経て、基礎的な日本語能力を身に付けてはいるものの、大学での学問に不自由なく対応できる力を持っている学生は少ないことが伺われた。留学生教育を充実さ

せるためには、現状の留学生の問題点を明らかにし、大学での学問に対応できる能力をいかに育成していくのかを再検討することが不可欠である。

そこで本稿では、まず、入学試験を分析し、入学時に留学生が持っている能力について述べる。次に、大学入学後の留学生の問題点を整理し、何を指導する必要があるのかを探る。そして、最後に具体的な指導方法を提案していく。

1 入学時の能力

恵泉女学園大学では、出願資格として「日本語能力試験」1級もしくは「日本留学試験」200点以上を求め、さらに大学独自の日本語理解テストと面接試験を実施している。日本語理解テストは、時事の話題を取り上げた講義形式で話されるVTRを見て内容についての質問に答えるというもので、聴解力と書く能力を測るものとなっている。面接試験では、留学生とのやり取りから、聴解力と発話能力が測定される。つまり、筆記、面接試験を通して、日本語の聴解力、書く能力、発話能力を測る内容になっている。

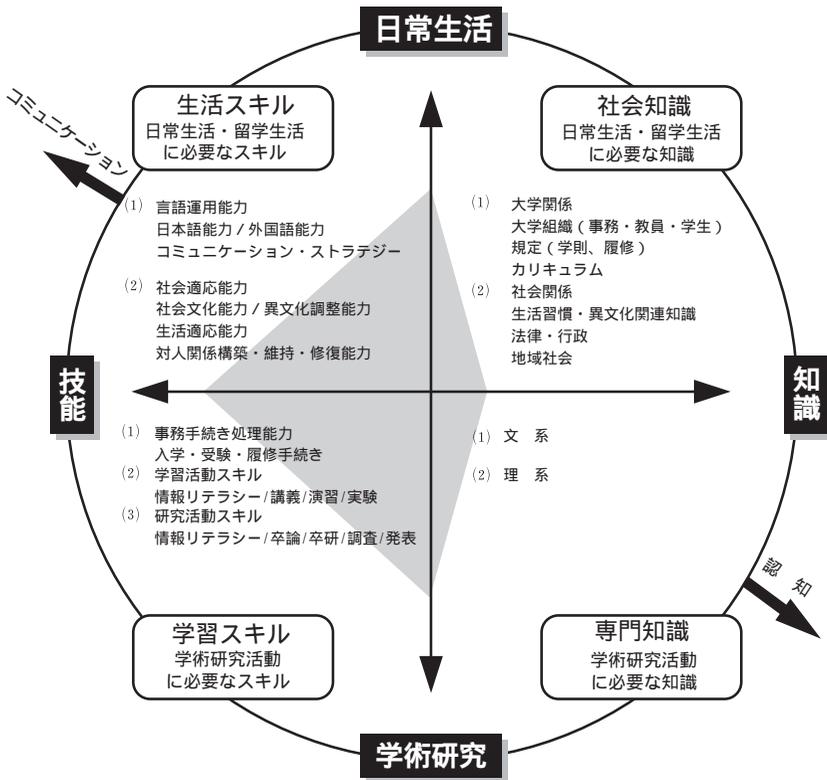
出願資格の「日本語能力試験」1級の試験内容は、高度の文法、2000字程度の漢字、10000語程度の語彙、社会生活をする上で必要な総合的な日本語能力（900時間程度学習したレベル）となっており、70%の正解で合格となる。試験は、「文字・語彙」、「聴解」、「読解・文法」と3分野に分けて行われ、漢字を含む語彙力、聴解力、読解力、文法能力を測る内容となっている。しかし、2002年度からは、日本の大学、専門学校は「日本留学試験」を利用することが多くなり、留学希望者の受験は必須ではなくなっている。恵泉でも今年度入学の留学生38名のうち36名が「日本留学試験」を受験し入学している。

「日本留学試験」は、日本語力および基礎学力を評価する試験で、日本語力については、アカデミック・ジャパニーズをシングルスケールで測定し、基礎学力（総合科目、数学、理科）については、日本の大学において教育指導を受けるにあたって必要とされる専門分野の基礎的な学力を測定するものである。以下、恵泉の出願資格である、日本語科目の試験について詳しく述

べる。

試験は、「記述問題」、「聴解・聴読解問題」、「読解問題」に分けられ、全部で400点満点となっている。日本語科目で測定されるアカデミック・ジャパニーズとは、日本の大学での勉学に対応できる日本語力という意味で用いられており、その測定対象能力が概念図（図1）で提示されている。

図1 測定対象能力概念図



概念図には日本での留学場面を想定したスキルと知識領域の全体象が示され、試験で測定するものを灰色の網掛け部分で表わしている。「日本留学試験日本語シラバス」では、この試験の目的を「日本での留学生活をおくる上で、日本語によるコミュニケーション能力があるかどうか、また、自国での

初等・中等教育修了までに習得した知識を前提としながら，日本の大学で学習・研究活動を行うための日本語能力があるかどうかを測定する言語テストであり，かつ，標準テストである」と述べている。ここから，試験では，主に日本語コミュニケーション能力（概念図での「生活スキル」）と大学で学習・研究活動を行うための日本語能力（概念図での「学習スキル」）を測定することが分かる。

「日本語シラバス」ではさらに，留学生が日本の大学入学後に直面する現実的な課題を類型化し，試験に適應する，と記されている。その大学における課題とは以下の8つである。

- 1．指示を実行する
- 2．事物を特定する
- 3．事物を描写する
- 4．事物を比較・配列する
- 5．物事の推移・展開を予測する
- 6．物事の背景や意図を把握する
- 7．物事を構造化し，法則性を発見する
- 8．その他

この8つに類型化された課題は，日本語能力のみならず一般的な思考力スキルと関わっており，実際に大学で求められる能力を反映しているといえる。

試験で要求される日本語の言語技能は，聞く，話す（間接測定），読む，書く，翻訳する（間接測定）の5つとなっている。さらに，この5つの言語技能の下位技能として，

- 1．情報全体の流れをとらえる
- 2．情報の全体をある判断や評価をしながらとらえる
- 3．特定の情報を抽出してとらえる
- 4．推測しながら情報をとらえる
- 5．予測しながら情報をとらえる
- 6．その他

という6つがあげられている。この6つの下位能力は，大学で講義を聞く，

文献を読む際の理解力と関わりをもっている。つまり、先に示した「課題の類型」と「言語技能の下位技能」は、入学後の思考力、理解力を示すもので、大学入学後の適正を考える上で重要である。

しかしながら、試験内容を分析した門倉（2001，2002，2003）は、大学で多くの文献を読むことが求められるが試験の聴解要素の比重が大きく読解の比重が軽い、内容も「日常生活における言語運用能力」を見る問題が入っているため大学の講義、課題に相当する「アカデミック」な内容が極めて少ない、入学後に集中的に指導したほうが効果的だと思われる友人同士のくだけた会話など「キャンパス・ジャパニーズ」が多すぎる、漢字・語彙など日本語に関する知識のみを問う問題は一切出題されない、問題数が少ない、等の問題点を指摘している。さらに、試験は主に日本の大学での生活日本語（概念図でいう生活スキル）を測定するもの（田尻2001）、大学で学ぶ上で重要な「課題の類型」と「言語下位技能」は実際の問題には反映されているようには思えない（門倉2003）、という批判がなされている。

また、「日本留学試験」は海外から直接留学を希望する者にも不利にならないように配慮されているため難易度が低く、上位成績者と下位成績者の幅があまり計れない（門倉2001）という問題が指摘されている。そのため、はたして「日本留学試験」で「大学の授業にすぐに入れる力」が判定できるのだろうかという疑問（堀井2002）がある。

これらの指摘から、「日本留学試験」は「アカデミック・ジャパニーズ」の測定を掲げ、「課題の類型」「言語下位技能」など大学における学習活動に関連した能力を示したものの、現状では日本語の生活スキルに重点が置かれ、大学に適應できる能力を持っているかどうかを試験により総合的に測ることが困難であるといえるだろう。また、「日本留学試験」は「日本語能力試験」と異なり、日本語に関する知識のみを測定しないため、日本語能力そのものが十分ではない学生が入学してくる可能性もある。

恵泉では独自の日本語理解力テストを実施しているが、一度の試験で大学での実践的な能力を測定するには限界がある。堀井（2002）が「日本の大学のアカデミックスタイルを分析し、それにのっとった、日本語補習体制を含

めた受け入れ体制の整備を、泥縄式ではなく、システムティックに各大学の関連部署が連携して、再構築していくことが必要である」と指摘をしているように、入学後の教育で補うべきものは大きいと思われる。

2 入学後の問題点

入学後に生じる留学生の問題点について、教員と留学生それぞれの観点から整理する。最初に、教員からみた留学生の問題点について、2004年度に恵泉で行った「留学生の日本語能力と授業参加に関するアンケート」結果をまとめる。次に、2005年5月に行った面談から、留学生自身が感じている困難点について述べる。

2 - 1 大学教員が指摘する留学生の問題点

教員が感じている留学生の問題点について、恵泉で2004年度に行ったアンケート調査の結果を表1にまとめた。

日本語能力の問題点としては、文法、聴解力、語彙力、書く能力/読む能力があがっている。それぞれの能力は密接に関わりがあり、切り離して考えることは出来ない。基本的な文法力、語彙力不足が、聴解力、書く能力、読む能力の問題を生み出している。その他で指摘されている留学生間の日本語能力の差という問題は重要で、日本語能力が低い学生は学年があがるにつれ通常の学部の授業についていくことがさらに困難になることが予想される。留学生の能力差については、多和田(2003)、宮城(2003)が行った調査結果でも示されており、大学に入学できる日本語力だけでは大学の授業に対応できない留学生が多いといえる。入学早期に、いかに基礎的な日本語能力の強化を図るかが課題となっている。

これから伸ばす必要がある日本語能力としては、基礎日本語、聴解力、語彙力、書く能力があがっている。その中でも、特に、授業を聞きながらメモを取るといった複合的な処理や、知識、思考力、論理性が問われるレポートを書くことに対する能力養成への指摘に注目したい。こうした能力は1節で取り上げた「日本留学試験」で測定できない理解力、思考力と関連が深く、

大学入学後の指導が必要とされる項目であると考えられる。

表 1 2004年教員アンケート結果

留学生の日本語能力の問題点	これから伸ばす必要がある能力
<p>文法</p> <ul style="list-style-type: none"> ・文法に問題がある ・的確に記述する文法 ・「てにをは」など助詞の使い方 <p>聴解力</p> <ul style="list-style-type: none"> ・教員の省略のある自然な日本語の聞き取り ・ゆっくりはっきり話してもわからない ・授業内容を聞き取る力がないためノートが取れない <p>語彙力</p> <ul style="list-style-type: none"> ・語彙に問題がある ・語彙が少ないため話についていけない ・テクニカルタームやその類の熟語の理解 <p>書く能力 / 読む能力</p> <ul style="list-style-type: none"> ・クラスの短い課題さえ書くことができない ・読む、書く、両方の能力について不安を感じる <p>その他</p> <ul style="list-style-type: none"> ・留学生の間に日本語能力の大きな差がある 	<p>基礎日本語</p> <ul style="list-style-type: none"> ・能力が高くない学生向けの基礎講座 <p>聴解力</p> <ul style="list-style-type: none"> ・授業を聞きながらメモを取る能力 <p>語彙力</p> <ul style="list-style-type: none"> ・和製英語、カタカナ語の処理 <p>書く能力 / 読む能力</p> <ul style="list-style-type: none"> ・書く訓練が大切 ・レポートを書く訓練 ・「読む、書く」の力、特に「書く」力 <p>大学社会適応能力</p> <ul style="list-style-type: none"> ・カンニングをしない、時間を守る、周りの学生と仲良くするなど、日本の大学の学生として普通の生活ができるようにする ・ルールと礼儀をしっかりと教え込む <p>その他</p> <ul style="list-style-type: none"> ・それぞれの担当の教員と連絡を密にして対応してほしい

留学生の問題点が日本語力以外にも及ぶことを示しているのが、大学社会適応能力に分類した、「カンニングをしない、時間を守る、周りの学生と仲良くするなど、日本の大学の学生として普通の生活ができるようにする」、「ルールと礼儀をしっかりと教え込む」、というものである。日本語予備教育機関を経て入学してくるものの、留学生は、いわゆる日本の学校文化に初めて接するものが多い。大学文化は比較的自由度が高いとはいえども、どのような行動が受け入れられ、評価されるのかという暗黙のルールがあるのではないだろうか。留学生がこうしたことを自発的に汲み取ることは難しいと考えられる。適応を強制することは避けるべきであるが、知らずに誤解を受けることがないように、意識的に文化的要素を取り入れた指導することが大切であろう。

2 - 2 留学生が抱える入学後の困難点

2005年5月から6月にかけて行った1年生37名⁽¹⁾の留学生への面談での結果を表2にまとめる。同じような意見は集約して示した。

表2 2005年留学生面談結果

勉強について	勉強方法がわからない
日本語能力 ・敬語がわからない ・語彙を増やしたい ・文法を強化したい ・日本語がまだ下手，基本的な勉強が必要	・どのように授業の勉強をしたらいいのかわからない ・真面目に勉強しているが，いい評価，成績に結びつかない
授業について	大学生活について
・授業についていくのが難しい ・授業内容がほとんどわからない ・文化人類学の授業が難しくついていけないのでもう出席していない ・先生の言葉がわからない ・日本語能力が難しい，課題が多い ・レポート，課題が不安 ・英語の授業は難しいが補講クラスを設けてもらったのでよかった ・英語の授業で日本について説明するものが多いができない ・他の授業についても，英語のクラスのような補講クラスがあるといい ・キリスト教関係の授業は理解が難しい，勉強するポイントがわからない，自分には必要ない	人間関係 ・中国人同士で固まることを極力さける ・友人とこまめに連絡をとり行動を一緒にするのは抵抗がある ・同級生がみな年下 ・一人で行動するほうが気楽 その他 ・スクールバスが混む ・大学で留学生の旅行があるといい
	生活一般について
	・急性胃腸炎になってしまった ・家が遠いので大変だが，契約状況や金銭問題，家族，親戚との関係で近くに引っ越せない ・アルバイトが忙しい

日本語能力については，文法，語彙力の面で十分ではないと認識している留学生が多かった。授業については，教員からも指摘されていた聴解力の弱さから，授業内容がわからないという声があった。テキストに従って進められる講義は，授業後に内容を確認できるが，そうではない講義の場合，聞き取れないためノートも取れず，授業後に補うことが不可能になる。その結果，面接では1名のみであったが，まったく分からないのでもう授業に出席していないという学生も出てきてしまう。

こうした授業についていけない要因としては、言語知識の不足、言語運用技能の不足、一般（社会）知識の不足、学習・研究技能の未熟、専門基礎知識の不足（因2003）が考えられる。留学生への日本語教育で出来ることは、講義でよく使われる語彙・表現を指導し、分からない言葉があってもメモをとり、後で内容を推測できるような聴解練習を行うなど、言語知識、言語運用技能面でのサポートである。また、教員からも指摘があったが、留学生が効果的にノートを取る学習技能も指導する必要がある。

2005年度から恵泉女学園大学で1年生の日本人学生に対し必修となった文章表現の授業「日本語能力」について、課題が多く難しいと感じている学生が多かった。これと関連して、レポートや感想文といった授業の課題への不安の声が聞かれた。これまで日本語予備教育機関で400字程度の作文を書く機会は多かったが、まとまった文章を書いたことがないのでどのように書いたらいいのか分からないというものである。大学で課されるレポートを大別すると以下の4種類（三宅2003a）に分けられる。

1. 授業で習ったところやテキストに書かれていることを理解し、整理してまとめるもの
2. あるテーマに関して、その分野で分かっていることや研究されていることを調べてまとめるもの
3. あるテーマで与えられた課題について、自分でまず考え、関連する論文や資料を集めて考えを修正する。最後に論文や資料を使いながら自分の考えをまとめていくもの
4. あるテーマで与えられた課題について、まず自分で考え、関連する論文や資料を集め、自ら調査や実験を行い、その結果をまとめ、考察するもの。

このうち「日本語能力」では、最終的に2や3のレポート作成を目指して授業を行っているのだが、春学期に出された留学生のレポートを概観すると、自分の意見、考えだけで論を展開する作文スタイルから抜け切れていないという問題が見られた。まず、同じ書くという作業であっても、作文とレポートでは目指しているものがまったく異なるということを留学生に意識さ

せる必要がある。また、レポートを書くという作業は、日本語能力だけではなく、客観性、論理性といった思考力が求められる。書くことを繰り返し訓練する中で、思考力をも高めていく指導を心がけたい。

中国朝鮮族の学生からは、英語の授業への困難点が語られた。朝鮮族の学校で学んでいる場合、学校教育での学習言語は、朝鮮語、中国語であり、外国語として日本語を選択することが多いため、アルファベットから指導する必要がある学生もいる。幸い、留学生へのサポートクラスが設けられ、英語クラスについては困難を克服しているようであった。英語以外の難しい授業についても、補講のクラスを設けるといったサポートを期待する声があった。

難しい授業として多くの学生があげていたのは、キリスト教関係の授業である。特に、クリスチャンではない中国人学生はキリスト教についての知識がない。そのため、宗教の授業で一体何を学べばいいのか、勉強するポイントがわからないという意見があった。宗教とは信じるものだと思っている学生は、自分には必要ないと感情的に拒否している様子もみられた。学問としてキリスト教を見つめるという視点の指導が必要なのではないだろうか。

どのように授業の勉強をしたらいいのかわからない、いい評価、成績をもらうにはどうしたらいいのか等、日本の大学での勉強方法がわからないという留学生もいた。出されたものをひらすら暗記をするという受け身の日本語学習方法に慣れた留学生にとっては、大学で学ぶとはどういうことなのかを把握して、自律的に勉強をするコツを掴むことが困難なことがわかった。

大学生活については、中国人同士で固まりたくない、常に一緒に行動する日本人の付き合い方に抵抗がある、同級生が年下、など人間関係に関する意見が多かった。性格もあるかと思うが、一人で行動するのが気楽という学生もいた。このことは教員が指摘していた大学社会適応能力とも関連するものであり、他の学生とのコミュニケーションが円滑に進むようどう支援できるかも考慮していく必要がある。

3 学問に対応できる能力とその指導

入学後の問題点を整理した結果、大学での学問に対応する能力として、授業についていける日本語能力（聴解力・書く能力）、そして、大学での勉強方法や人間関係の構築という、大学社会に適応できる能力が求められていることがわかった。以下それぞれに対する具体的な指導法を考えていく。

3 - 1 日本語能力

講義に特徴的な話し方に慣れ、聴解力を伸ばすために、2005年春学期は『講義を聞く技術』（産能短期大学日本語教育研究編、産能大学出版部刊）を使用した。このテキストは、10分ほどの大学の講義形式の独話を聞いて、内容理解の確認練習をする構成になっている。話される日本語は、文末が曖昧で、繰り返す、いい間違いなども含む自然な話し方に近い。何度も聞くことによって耳がなれるという利点がある。問題点としては、10分と短いことで講義全体の流れが掴めないことがあげられる。若松（1994）は、講義には、

1. テーマの紹介
2. 身近なところから例をとり、そのテーマを取り上げる理由、講義の進め方に言及
3. 本題に入る
4. 具体例をあげ、テーマを発展させていく
5. 少し本筋から外れた話をし、本題にもどる
6. 具体例をあげ、テーマを発展させていく
7. また本題に戻る
8. 結論を述べる

という流れがあり、こうした講義の構造・流れが分かっているならば学習者はある程度余裕をもって講義を聞くことができるとしている。

確かに、今何が話されているのかが分かれば、重要なポイントとそうでないものを見分けることの助けになり、講義を聞く負担が軽減される。もちろん

ん、全ての講義が同じように展開されるわけではないが、留学生がそれぞれの講義の流れの特徴をつかむことが出来るように、ある程度の長さをもった内容を聞かせ、話の流れを確認するという活動を取り入れていきたい。

当然、長い時間の聞き取りは認知的負担も高く、さらに講義の内容は、未知の知識であることが多い。そのため、話のテーマから内容や展開をある程度予測する技能が重要である。聞き取りの前にテーマから推測される内容を学生に問う、話し合いをさせる、など予測の習慣をつける練習も必要である。

また、講義は聴覚だけではなく、教員の示す板書、資料など視覚的な情報を処理することも求められる。こうした複合的な能力を習得するには、映像を加えた教材により、聞きながらテロップなど視覚的な情報をノートに書き取る練習をしていきたい。

授業でのレポートや課題を書く能力の育成には、2節でも述べたように、まず、これまで書いてきた作文との違いを理解させることから始めなければならない。日本人学生が実際に書いたレポートを見せながら、具体的に作成過程から順を追って説明していく必要がある。

レポート作成において留学生は、文献、資料を読み込む読解力不足、論理を組み立てることの難しさ、専門語彙を含む語彙や表現の不足、専門の内容に関する専門知識の不足、という問題に直面するという(二通2003)。語彙や知識の不足はその都度補っていくとして、読解力、論理的思考力は、レポート作成のみならず全ての学習活動に不可欠な能力である。村上(2003)は、留学生は「理解するだけでなく、コメントする能力、問題を見つける能力に乏しい」とし、レポート作成の際も、「インターネットなどの情報を利用することが多いが、何を引用するか、ただ引用するだけでなくそれに対し自分の意見を述べることに不慣れな学生が多い」と指摘している。確かに恵泉の留学生が書いたレポートも、事実と意見が分けられていない、引用だけで終わってしまっているという問題をもっていた。留学生の日本語授業を、日本語能力の強化に終わらせるのではなく、文献や資料を批判的に読む力、文献から得た知識と自分の意見を整理し論理的に述べる能力への指導まで踏

み込んで考える必要がある。批判的に読む読解力，思考力を育成するために，読解授業に「クリティカル・シンキング（批判的思考法）」を取り入れることを提案したい。

クリティカル・シンキングに関する著書は多い¹²⁾が，その中でも部分的に読解授業に応用できる『質問力を鍛える クリティカル・シンキング練習帳』（M・ニールブラウン，スチュアートキリー，森平慶司・訳 PHP 研究所）の11の質問を紹介する。

『11のクリティカル・クエスチョン』

- 1．問題および結論は何か
- 2．理由は何か
- 3．どの語句が曖昧か
- 4．価値対立と前提はなにか
- 5．記述前提は何か
- 6．推論の誤りはないか
- 7．証拠は十分か
- 8．対抗原因はあるか
- 9．統計に偽りはないか
- 10．どんな重要情報が省かれているか
- 11．どんな論理的結論が可能か

読解の授業で，日本語表現の練習，内容を確認したのち，11の質問の中から1つもしくは2つを提示し，学生と共に考えていくという活動を加えることにより，批判的に捉える視点を持つことが可能なのではないだろうか。

3 - 2 大学社会適応能力

留学生が勉強の方法，人間関係の構築，といった問題を抱えていることは2節で示した通りである。このうち学習面での大学社会適応への困難点については，留学生だけの問題ではなく，日本人学生へも共通するものだという見解がある（門倉2003，三宅2003b，因2003）。

確かにここ数年の間に，日本人学生の学習能力の低下が指摘され，大学で

の勉強方法，アカデミック・スキル，スタディ・スキルといった著書³が数多く発刊されている。どの本も高校までの受け身の学習から，自ら課題を見つけ能動的に学習できるよう工夫されている。大学で何をどう学ぶのかといった基本的な問いから，講義を聞く方法，ノートの取り方，文献を読み込む技術，レポートの書き方，調べ方，発表レジュメのつくり方，発表の方法等のスキルを扱っている。スキルだけでなく，高校のような密接な人間関係を築きにくい大学で，どのように自分を見つめ支えていくかを指南するもの⁴もある。これらの知見を留学生教育に積極的に取り入れ，日本語能力とアカデミック・スキル双方の育成を目指していく必要があるだろう。

まとめと今後の課題

4月に学期がスタートして以来，それぞれのクラスの状況を把握し，密に連絡を取り合うために，留学生担当者で月に一度打ち合わせを行っている。留学生の能力の差は入学時点からあったが，打ち合わせを重ねる度にその差が広がっているのではないかと感じていた。その能力の差というのは日本語能力だけでなく，それ以外の要素が深く関わっているという感触を持っていたが，入学後の留学生が抱える問題点を分析し，その差が一般的な思考力や適応能力なのだとということがわかった。留学生の日本語クラスではこれまで日本語能力の補強ということに重きを置いていたが，今後は思考能力の育成をも考慮した授業を展開し，留学生の総合的な能力を高めていきたい。

大学生活における留学生の人間関係の構築，特に教員や日本人学生とのコミュニケーションの問題については，どのようなサポートができるか，さらに詳しい現状分析をする必要がある。今後の課題としたい。

参考文献

因 京子 (2003) 「学部留学生の学習活動の現状と意識 - 九州大学の場合 - 」『日本留学試験とアカデミック・ジャパニーズ』平成14 - 16年度科学補助金基盤研究(A)(1)研究成果中間報告書』63 - 72

門倉正美 (2001) 「日本留学試験のねらいと問題点 - 「日本留学試験」の「最

- 終報告書」を読む」『横浜国立大学留学生センター紀要』8 横浜国立大学
- 門倉正美(2002)「日本留学試験の問題点(2) - 「公開用問題」の分析」『横浜国立大学留学生センター紀要』9 横浜国立大学
- 門倉正美(2003)「アカデミック・ジャパニーズとは何か」『日本留学試験とアカデミック・ジャパニーズ』平成14 - 16年度科学補助金基盤研究(A)(1)研究成果中間報告書』123 - 132
- 田尻英三(2001)「大学の情報公開を」『月間日本語』12月号 アルク
- 多和田眞一郎(2003)「留学生と日本語教育」『広島大学留学生教育』第7号 広島大学留学生センター 広島大学
- 二通信子(1996)「レポート指導に関するアンケート調査の報告」『北海学園大学学園論集』第86・87号 北海学園
- 二通信子(2003)「専門科目でのレポート課題の実態とレポート作成上の問題点 - 専門教員および留学生へのインタビューから」『日本留学試験とアカデミック・ジャパニーズ』平成14 - 16年度科学補助金基盤研究(A)(1)研究成果中間報告書』89 - 100
- 堀井恵子(2002)「『日本留学試験』とその『日本語試験』: 今後の活用へ向けての課題と提案 - シラバスと試行試験を分析して・・・」『留学生教育』第7号 留学生教育学会
- 堀井恵子(2003)「留学生が大学入学時に必要な日本語力は何か - 『アカデミック・ジャパニーズ』と『日本留学試験』の『日本語試験』を整理する」『日本留学試験とアカデミック・ジャパニーズ』平成14 - 16年度科学補助金基盤研究(A)(1)研究成果中間報告書』113 - 122
- 宮城幸恵(2003)「学部留学生の学習上の困難点を探る - 留学生の学習・指導に関するアンケート調査の分析を通して - 」『東海大学紀要 留学生教育センター』第23号 東海大学
- 三宅和子(2003a)「日本語の世界を探索する(2) - レポートを書く, 文献を読む, 引用する」『東洋』第2号 東洋大学通信教育部
- 三宅和子(2003b)「留学生・日本人大学生のアカデミック・ジャパニーズ

とは」『日本留学試験とアカデミック・ジャパニーズ』平成14 - 16年度
科学補助金基盤研究(A)(1)研究成果中間報告書』101 - 112

村上京子(2003)「大学教育と日本留学試験(1) - 学部留学生の大学生活にお
ける日本語運用上の困難 - 」『日本留学試験とアカデミック・ジャパ
ニーズ』平成14 - 16年度科学補助金基盤研究(A)(1)研究成果中間報告書47
- 61

若松久恵(1994)「中・上級学習者に対する聴解の指導 - 独話の理解を通し
て」『東海大学留学生センター30周年記念論集』東海大学留学生セン
ター

財団法人日本国際教育支援協会発行「平成17年度日本語能力試験実施内容」
『試験の内容』「日本留学のための新たな試験について - 来日前入学許
可の実現に向けて」(2000)「日本留学のための新たな試験」調査研究協
力者会議

- (1) 入学した留学生は38名だが、1名の学生はビザの更新に問題があり大
学に来ていなかったため、37名となった
- (2) E. B. ゼタミスタ, J. E. ジョンソン(1996, 1997)『クリティカル・
シンキング入門・実践編』北大路書房, 道田泰司, 宮元博章(1999)
『クリティカル進化論「OL進化論」で学ぶ思考の技法』北大路書房,
リチャード・ポール, リンダ・エルダー(2003)『クリティカル・シン
キング「思考」と「行動」を高める基礎講座』東洋経済新報社, など
多数
- (3) 森靖雄(1995)『大学生の学習テクニック』大月書店, 藤田哲也
(2002)『大学基礎講座 これから大学で学ぶ人に送る「大学では教え
てくれないこと』』北大路書房, 学習技術研究会編(2002)『知へのス
テップ』くろしお出版, 田中共子編(2003)『よくわかる学びの技法』
ミネルヴァ書房, など
- (4) 森靖雄(1995)「大学生生活充実編」『大学生の学習テクニック』大
月書店